

## 歴史の中の留学生 ②

## 日本からパラオへ

昭和4年7月26日、マルキヨクで佐藤嘉一と共に布教していた清水芳雄が Dengue 熱で亡くなった。その遺骨を引き取りに天理教教会本部の山澤為次がパラオに向かった。当時、山澤為次は教会本部の海外伝道部第1課長であった。その際にマルキヨクの酋長アルクライが、エラケツを日本へ連れて行って天理教校別科に入れて、立派な布教師になってもらうように山澤にお願いしたようだ。それはエラケツを弟のようにかわいがっていた清水芳雄の思いでもあり、約束でもあった。そして山澤は、清水が残したマルキヨクの集談所をエラケツに継がせようと決め、昭和4年9月に彼を日本へ連れて帰ったのである。これがエラケツ来日の経緯であるが、来日したエラケツは清水芳雄の葬儀に参列したあと、神戸市垂水区の天理教名田分教会で天理教の教導を受けたようだ。その際、エラケツは、兵神大教会から清水芳雄の後任として派遣される高田敏造、近藤暢三郎の2名に、現地の事情や言葉の指導を行った（『東南アジア伝道資料調査考(6)』14～15頁）。そして天理での生活に関しては、山澤為次が世話取りをしていたようだ。写真はエラケツが3回目の来日中、昭和10年に神戸港で撮影されたものだが、ジャワ出身で天理外語に勤務していたラデン・スリアディ氏の帰国に際して見送りに行った時のものである。左から2番目がエラケツ、右から3番目、4番目が山澤為次夫妻である。



「山澤為次夫妻とエラケツたち」(天理教海外部アジア1課所蔵)

## 天理で学んだエラケツ

エラケツが天理に来ていたのはいつ頃なのか、またどういった人間関係を持っていたのか、全体像が分かりづらかったので、パソコンのExcelで年表を作り、資料にある事項を時系列に合わせて入力していくことにした。それで次第にわかってきたのだが、エラケツは昭和4年から昭和11年の間に3度、来日していたようだ。最も長く滞在したのが、第1回目の来日で、多くの日本人と友達になったようだ。上記の資料によれば、エラケツは来日後、天理小学校、天理中学校、天理教校別科で学んでいたということだが、昭和4年頃であるから、天理中学校は旧制の5年制の中学で、天理教校は天理教教師養成機関として本科が1年、別科が6カ月であったはずだ。本科はこの時期、まだ開設されておらず、昭和13年に修業年限2カ年で始まっ

た（『天理教事典 第三版』632頁）。そうになると、小学校、中学校では編入という形で学んでいたのだろうかとも思えるが、定かではない。明治43年（1910）に生まれたことから考えると、民政時代、南洋庁施政時代にパラオで日本語も学んでいたと推定できる。おそらく昭和4年に来日した時には19歳くらいで、天理教校別科に入るまでの3年あまりの間、天理小学校、中学校で学んでいたことになる。小学生からは「エラケツちゃん」と呼ばれていたようで、そこから想像してみたのだが、明るく陽気な性格で日本語も話せて、歌が好きだったことから学校でも人気者だったようだ。クラスではどんな感じで過ごしていたのだろうか、気になるところである。

## 信仰の転換期

エラケツの最初の帰国に際して刊行された『エラケツ君送別記念文集』（エラケツ君送別記念文集刊行会：1933）の中には、彼が昭和8年2月に天理教校別科第49期を卒業し、6月に帰国するまでの友人たちとの思い出がたくさん書かれていて、本当にエラケツが人々から慕われていたことが窺える。陽気でスポーツや歌が好きで、語学に堪能で、詩人であり、宗教家であったようだ。この送別記念文集の最初にはエラケツが帰国に際して残した詩が載っているが、別れの悲しい気持ちがよく表れている。また文集の中では、懇意にしていた藤原徳治が次のように述べている。「彼氏が御地場に来てから本年で満4カ年に垂んとしています。僕が天理小学校へ参りましたのは昭和6年の4月でした。当時の彼氏は唯向学の道に一途邁進して居られた様だ。一昨年の9月彼氏が別科入学を志すに付いて私に話された。勿論僕は其の道をお奨め致しました。黒い教服に身を纏め意気揚々として未来の大教会長を想像されていたと存じます。（中略）彼は始め外語、小学校、教校に起居されていたのですが、病氣以来、山澤先生の宅へ転住されたのです。」（『エラケツ君送別記念文集』18～19頁：原文のまま）エラケツは昭和7年8月より病氣がちになり、山澤為次宅へ移り10月には重態になったようだ。その間、山澤から教理をもって諄々と教え諭されたことにより、11月には全快した。この経験から信仰的に大きく変わり、一時は絶望したが、たすかったことにより、生涯、天理教の道を通ると決心したようだ。別科卒業後は神戸へ布教にも行き、不思議なたすけをたくさん行ったようだ。この布教に際してお世話になっていたのが、神戸市の名田分教会である。そして昭和8年6月に山澤為次、本部青年中山慶一と共に横浜港発の近江丸でパラオに帰国した。彼は本当に歌が好きだったようで、帰国に当たり、港でも“天理青年、進めわれら”と天理教青年会歌を歌った。

今では、天理の町も海外から参詣に来る人や、天理教語学院や天理大学の留学生がいて、外国人がアーケードの中を歩いていることも珍しくはないが、当時はかなり珍しかったのではないと思う。町の人の声掛けにも愛嬌を振りまき、流暢な日本語で陽気に応えていたそうであるから、人気者であったのは間違いないようである。戦前の昭和の初め頃のことであるから、明治・大正生まれの人々の記憶の中にはきっとエラケツの笑顔が焼き付けられているとも思う。